

Vol.
13

Shumei International



Shumei International is dedicated to improving the human condition by restoring the environment, by fostering a deep appreciation of beauty and the arts, and by cultivating leadership among the next generation.

Shumei International has programs around the world. The organization is based upon the philosophy of Mokichi Okada. He taught that cultivating respect for nature and appreciation of the inherent beauty in the natural world will inspire a more humane and sharing vision for the world community.

NEWSLETTER

Vol.13

contents



【表紙】

バンダナ・シバ博士は「一つの種は、生命の源であり、私たちの生命につながっている」とおっしゃいました。昨年、バンダナ・シバ博士が来校したMIHO美学院中等教育学校生徒が秀明自然農法で自家採種した種を使って製作した「蓮の華」。



秀明インターナショナルは、1.国際協力 2.環境問題への取り組み 3.優れた芸術による人心の向上の3点を基本的なプログラムとして実践します。この実践により、個々の人間性、精神性の向上を促し、社会へ新しい人生観、価値観を提唱したいと考えています。そして、私たちと同様の目的を持つ世界中の人たち、団体と協力しあい、世界平和に貢献していくことを目指しています。

Special Topics

Reimagining the Human Nature Relationship in Context of Disaster

災害の背景から 人と自然の関係を見つめ直す

▶ オープニングメッセージ

4 バンダナ・シバ博士 (ナブダーニャ財団 代表)

▶ ジャパンセッション

8 菅野 正寿 (NPO法人 福島有機農業ネットワーク代表)

12 横山 和成 (中央農業総合研究センター/農学博士)

16 薄羽 美江 (プロデューサー) / リサ・ヴォート (写真家)

21 アラン・今井 (秀明インターナショナル 理事)

▶ ユース発表

25 小山 昌英 (秀明ユース 代表)

▶ クロージングメッセージ

26 サティシュ・クマール (「リサージェンス」編集長)

▶ ビデオインタビュー

30 中東 弘 (枚岡神社 宮司)



会場のインディア・インターナショナルセンター

災害の背景から 人と自然の関係を見つめ直す

2013年11月15日、16日の2日間、インド・ニューデリーのインディア・インターナショナルセンターにおいて、独立行政法人 国際交流基金後援の下、ナブダーニャ財団主催の会議「Reimagining the Human Nature Relationship in Context of Disaster ～災害の背景から人と自然の関係を見つめ直す」が開かれ、Shumeiは共催として参加いたしました。

この会議は、インドを襲った大洪水、東日本大震災と大津波、アメリカを襲った巨大ハリケーンという3つの大災害を通して、人が自然から謙虚に学び、土地の生態系への理解を深め、地域社会のあり方、人と自然の関係を探索する目的で行われました。各国から多くの学者、活動家、地域市民などが集い、いろいろな発表、意見交換がされました。

会議は2日間にわたって行われ、バンダナ・シバ博士のオープニングメッセージで始まり、1日目の午前中はインドセッション、午後は日本のセッション、そして2日目の午前中にアメリカセッションと続き、最後は青年たちの発表と質疑応答が行われました。

そして国際的教育機関であるシューマッハ・カレッジを創設し、イギリスの環境雑誌「リサージェンス」の編集長でもあるサティシュ・クマール氏のスピーチで締めくくられました。77歳になられるサティシュ氏の力強いお言葉に参加者一同、勇気を頂き、大きな拍手と共に会議は終了しました。

Reimagining the Human Nature
Relationship in Context of Disaster



バンダナ・シバ Vandana Shiva

ナブダーニャ 代表

インド・デラドゥン生まれ。カナダのウエスタン・オンタリオ大学で物理学及び科学哲学の博士号を取得。1987年、生物多様性や種子の保全、有機農業を推進する団体ナブダーニャ (Navdanya) を設立。自然を慈しみ、生命の尊厳を守る活動を展開し、貧しい人々や女性の視点に立って、開発やグローバリゼーションのもたらす矛盾を鋭く指摘。世界の農民や環境活動家たちに大きな影響を与えている

頻発する自然災害は物質文明への警鐘！

自然災害でなく人為災害

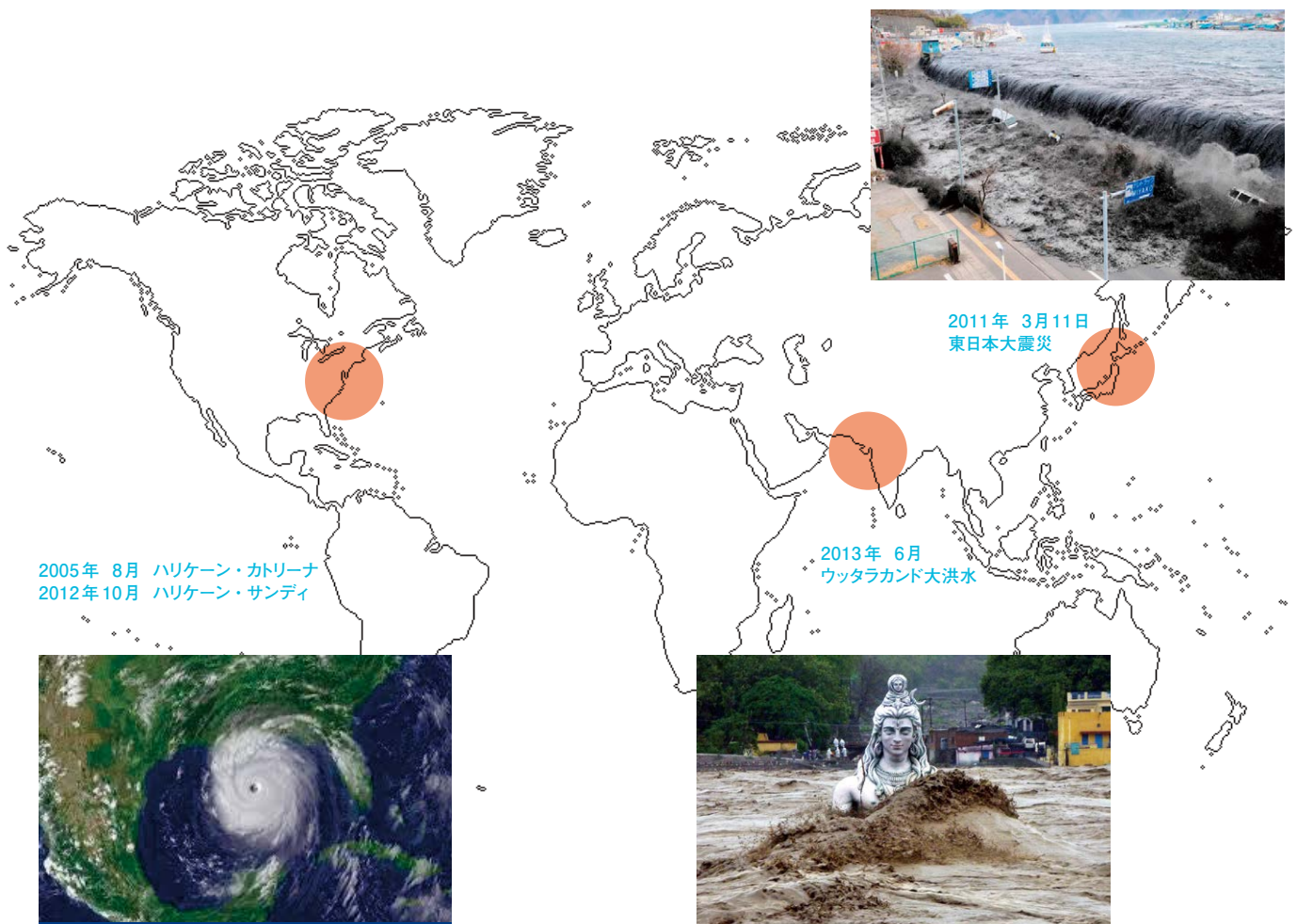
この会議の開催にご尽力いただきました皆さま、特に日本の「国際交流基金」の協賛によりこの会議開催が可能となりましたことを深く感謝申し上げます。

1年前にこの会議を企画し始めたころには、ウッタラカンド州の洪水はまだ起こっていませんでした。つい先日にはフィリピンで台風災害がありました。最近、新しいタイプのサイクロンが頻発しています。それは破壊の規模の大きさからスーパーサイクロンとも呼ばれています。近年の状況からすると、これらの異常気象がもはや異常ではなくなっていることは誰が目にも明らかなです。そのような状況にあって私たちは2つの問題を抱えています。

第1に、近年の異常現象災害による自然からの警告に対して、国際社会を牽引する当局者たちの無理解と軽視、それ故に真の原因追求、解決、被災の復興がなされていないことです。現在、私たちの日常の生産と消費活動は化石燃料や長距離輸送に極度に依存し、それが自然環境に大きな負担を与えており、それらが加算されて近年の自然災害の頻度と激しさを増長させていることは明らかなです。過去にも干ばつはありましたが、最近の干ばつの在り方はもはや自然現象とは到底言えないものであって、人間が引き起こしたものとしか思えません。洪水もまた同じことです。極度に激しい自然現象はやはり人災であると思えます。大きな暴風雨をインドではサイクロンと呼び、アメリ

カでいうハリケーン、またフィリピンでは台風といいますが、これらの巨大暴風雨は海から大量の塩水を陸地にもたらします。

これらの災害現象を通して自然界は人間を真実に目覚めさせようとしているのです。その最中にありながら、今行われているワルシャワ気候変動会議で各国政府関係者は、気候変動、無秩序な気候不順の事実をなおも否認しようとしています。つまりこの政府間交渉はそれぞれ自国の利害を判断基準として行われているのです。裕福な国々は現状維持の下に経済活動の継続を望んでいます。彼らにとって被災者の救援活動は失うものが大きいのです。そのため被災者は今も苦悩にあえぎ、その犠牲となっているのです。しかもその犠牲者や被災者はちょっとやそっとの数ではありません。3年前のインダス川の洪水での死者は1万人、ウッタラカンドの洪水では2万人、フィリピンの台風では1万人が犠牲となりました。これらの災害において地球規模で失う生命の犠牲、環境破壊、経済的損失を考え合わせてみてください。私の記憶によれば、2009年の北インドに干ばつが起こっているときに、乾燥地帯の南インドでは大きな洪水が起こっていました。政府の公表による復興費用をざっと換算してみると約4千億円必要だということでした。気候変動に対する世界規模の会議を始めてからこの10年間、話し合いはするものの未だ確固たる政治的意欲が得られていません。そんな状況下で、この一つの災



今回取り上げられた自然災害

害の復興に必要な予算が4千億円だということです。自然の真実が繰り返されているこの現状と、一方の政治的、経済的な権力レベルでの交渉と活動の現状…… この2つの間には大きな断絶があります。

人間と自然のバランスの欠如

第2に、現代自然科学の発達とその理論によって人間が自然界から分離し、自然界における人間の役割から遠ざかってしまっていることです。大変光栄なことに、今回、サティシュ・クマールさんがお話しされます。彼はイギリスの「リサージェンス」誌の編集長で、この10月に健康と幸福に関する素晴らしいイベントを開催しました。その中で特に印象に残っているのは、英国聖公会の元大主教であったローワン・ウィリアムズ氏が著書本のサイン会をされていて、その本を私も読んでいます。それは神と聖職者について書かれたもので、いかに人間がその頭脳の働きを生物的・身体的機能としてのみに狭く絞り込み、真実を汚辱するような抽象的仮説理論を重ねるに至ったのかということについての非常に詳細な心理分析がなされています。私たち人間は還元主義的な範疇^{はんちゆう}をして全てを理解しよ

うとし、真理から遠ざかってしまったのです。もちろん過去において還元論的手法は開発に効率的に寄与してきたことも確かに事実です。しかし、環境破壊行為を阻止し修復することには十分ではありません。そのためには私たち人間は今^{しんし}真摯な心に立ち返り、極度の異常気象が通常現象となっているという現実を見据え、地上における自分たちの立場を認識することが肝心です。それでこの会議のタイトルを「自然と人間の関係性の再検討」としたのです。ウッタラカンド災害の修復支援活動に携わっている間、ナブダーニヤは農作業、種採取、養成講座等、全ての仕事を休止して被災地を見舞い、その状況改善に従事しました。それを通して気付いたのです。この近年の新しいタイプの災害による被災状況は非常に緊急な逼迫性^{ひつぱく}を呈しており、明らかにどんどんと大量の人が死んでいき、被災者自身がその事後処理に身をていしなければならず、そうした状況の中でホームレスが増加する一方です。しかし同時に私たち人間はこの地球上において一体何者なのか、何が私たちの役割なのか、と考え直すべき時が来ているのだとも気付かされたのです。



自家採種された種



今回のイベントフライヤー

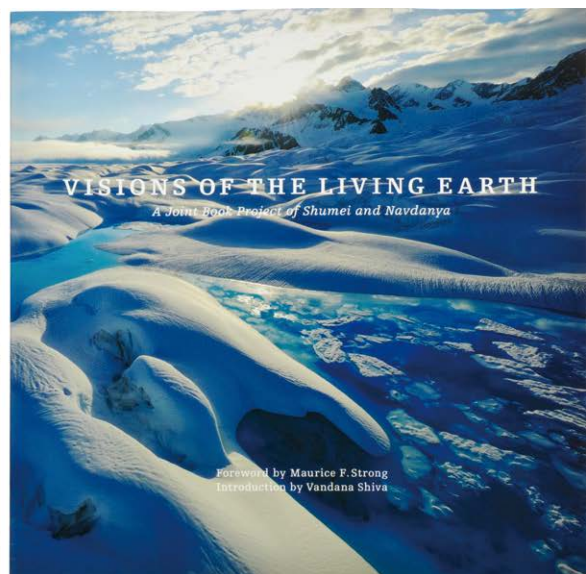
人間の知恵とエゴ

この2日間で、アメリカ、日本、インドの北と南の4地域で起きた災害を取り上げて討論をしていきたいと思えます。専門家の統計によると、世界の最も深刻な暴風雨やサイクロンの約65%がインド洋で発生しているそうです。ですからその沿岸は非常に被害を受けやすい地域なのです。2004年のスマトラ沖地震の津波で、大被害を受けたスリランカからわずか18キロしか離れていないインドのラーメシュワラム沿岸ではあまり被害を受けませんでした。それは1999年にインド東岸を直撃したサイクロン「オディシャ」に学んだラーメシュワラム沿岸自治体の大きな防災処置が功を奏したのです。

津波の余波の直後に被災地を訪れて、私たちに何ができるのか、何をすべきなのか、と住民に尋ねました。その中で2つのことが記憶に残っています。1つは、かなり以前のことですが、そこではエビ養殖産業に関する販売促進の公開説明会があり、そこで全ての漁師が声をそろえて「マングローブは防風林であり防潮堤の働きをしている、エビ養殖栽培はマングローブを破壊してしまう。この次に暴風雨が来たときに私たちを守ってくれるものが何も無くなる」と訴えました。そしてその通りになりました。マングローブ破壊に反対した村は災害から守られましたが、エビ養殖のために林を破壊した地域は大被害を受けました。

ですから私が何をすべきなのかと尋ねたときに、一人の女性がこう言いました「荒れ狂う波を静めることができるように植樹をしたい」。私はこの彼女の言葉を忘れることができません。マングローブはその土地に自生する在来種です。海は時として激しく荒れます。それは誰でも知っていることです。政権者は、次に来る津波を防ぎ得るだけの高さがあるかどうか定かでないまま、コンクリートの高い防波堤を建てることを対策とし、そのために沿岸1マイル圏内の漁師に立ち退きを要請します。さらに海岸沿いにリゾート開発を行えば、海は漁師にとってもっと危険なものとなります。開発という名の環境破壊行為のためにさらに規制緩和を行います。

私たちに課せられた大きな課題の1つは、災害の衝撃を緩和することです。これは地球レベルで考えなければなりません。例えばある場所での二酸化炭素排出が、地球の他の場所での暴風雨の原因となります。だからこそ、この問題に今のような国際的な注目が寄せられているのです。それにもかかわらず、他にもさまざまな地球環境の脆弱性を加速させている開発が行われている現状です。ダム建設などの水力発電プロジェクトや観光施設、道路建設、その他のいろいろな開発によって自然環境が脆弱化しています。この現状の適合理化について、特に農業の復興が必要な地域に関して、日本の福島での有機農法への試みと努力、そして



「Visions of the Living Earth(母なる地球のビジョン)」

その成果について後ほど聞かせていただきますが、今私たちが立ち向かわなければならない一番大きなことはこの災害による被害の緩和です。

ナブダーニャの活動とルーツとしての種の重要性

ご存じのようにナブダーニャの主な活動は種の自家採種保存と有機農業の推進です。種の保存を始めた当初、私たちはそれぞれの種が持つ多様な遺伝的特性を保持することが最重要事であると考えました。ところが突然、モンサントによる悪天候に対して耐久性を持つ種の特許権申請という事態が起こったのです。種の遺伝的特性とは人間の作り出したものではありません。これは自然環境に適合してまず種自体が進化するのです。例えば沿岸地域では、塩害に耐えるように種が進化し、その住民がこれは塩害に強い植物であると認識するわけです。干ばつや洪水、寒波や高温、そして塩害など全ての悪条件に耐久性を持つ種を開発したと主張して、モンサントが広範囲にわたる特許権請求を申請しました。幸運なことにその申請は却下されました。しかしこれはアメリカと太平洋圏経済をめぐる TPP（環太平洋経済連携協定）にとって非常に緊迫した問題を提起することとなるでしょう。

このような種の独占専売権を許すことは非常に大きな悲

劇を生みます。農家は災害によって全てを失い、その回復のために借金をしなければなりません。例えばインドの綿農家に実際に起こったことがその良い例です。20万8千人の農家が、種の特許権使用料を支払うために抱えた多額の負債を苦に自殺したのです。

今回私たちは、この会議でこれら全ての事実を基に再検討をします。人間は地上の主なのでしょうか、それとも全ての生物が織り成す生命体網のより糸の一本なのでしょうか？ 私たちは地球の所有者なのでしょうか、それとも地球共同体の一員なのでしょうか？ これはこの場限りの問題ではありません。この会議は、母なる地球の権利を認識するという私たちのキャンペーンのほんの一部です。Shumei とナブダーニャはリオ + 20 の会議のために「母なる地球のビジョン」と題してとてもすてきな美しい小冊子を作成しました。つまり私たちが転換すべきことはこの概念なのです。地球は死んでいません、生きているのです。ウッタラカンド洪水のフィルムで観たように、地域の住民はこの災害を地球の悲痛の叫びだと捉えています。地球が生きているとしたら、これら全ての災害は地球が人類の破壊行為に対する返答なのです。私たちはもうこれ以上、真実に対して目を瞑り、耳をふさぐことをやめなければなりません。今、その時が来ているのです。

農業の持つ多面的な価値を通して 多様性のある社会を目指す



すげの せいじ
菅野 正寿

福島有機農業ネットワーク代表

農林水産省農業者大学卒業後、農業に従事。
現在、水田2.5ha、雨よけトマト14a、野菜・雑穀2ha、
農産加工所(餅・おこわ・弁当)による
複合経営(あぶくま高原 遊雲の里ファーム)
NPO法人福島県有機農業ネットワーク代表
NPO法人ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会理事
共著に「放射能に克つ農の営み」(コモンズ社2012年)
「脱原発社会を創る30人の提言」(コモンズ社2011年)

私は30年前から有機農業を始めています。ところが30年前から牛肉、オレンジ、生糸などさまざまな農産物が急激に輸入され始めました。それによって使われず、荒れた田畑が100万エーカーにも上っています。その荒れた田んぼ、畑を再生しようと、2005年、農家と商店街でNPOを立ち上げました(図1)。

このNPOは地元の学校給食へ有機野菜を届け、健康食品としての桑の葉を加工して販売し、直売所によって雇用を生み出しました。そして地域の資源を生かしたコミュニティーづくりをスタートさせました。桑の葉は養蚕だけでなく非常に健康に良い成分も含まれています。さらに、農家と牧場と企業が出資して堆肥センターも立ち上げました。私たちの地域は畜産が盛んでしたので、この牛糞に14種類の食品残渣ざんさを加え、発酵させました。今、日本では年間約2千万トンもの食品残渣がゴミとして燃やされています。燃やされていたゴミを堆肥として再資源化しています。これによって地域全体の土が良くなり、大変おいしい作物が取れるようになりました。さらに新規就農者も30人以上私たちの地域に入ってきています。そうやってやっと軌道に乗ってきたときに福島原発事故が occurred しました。

私の所は原発から約50キロメートルの所にあります。いまだに14万人が避難しているという異常な事態が続いています。

止まらない汚染水、福島から見れば東京オリンピックどころではありません。私たちの7千人の小さな地域に3千人が避難してきました。避難区域にいる有機農家の仲間も、「耕したくても耕せない」状況で、仮設住宅や借り上げアパートの暮らしが続き、精神的ストレスが限界にきています。

出荷制限のかかった有機農家が震災から10日後に自殺しています。酪農家も自殺しています。何十年とかけて土づくりをしてきた農家の、この放射能による苦しみは大きいのです。私の娘は25歳になりますが、震災前から一緒に農業をしています。震災後10日間ほど避難しましたが、今は一緒に農業をやっています。しかしながら農家の内部被曝ばく、外部被曝の実態調査は十分ではありません。私が1週間外部線量のバッジを付けて調査をしました。明らかに畑、田んぼにいるときの線量が高いのが分かりました。ですから私たちは農民の健康調査、医療体制をしっかりしてほしいと考えています。

残念ながら地元の農産物の産地直送でやってきた学校給食もまだ一部しか復活していません。住宅の除染も30%しか進んでいません。新潟大学が私の集落の線量を計ったマップです(図2)。明らかに森林の側が線量が高いのが分かります。実はいまだに福島のコノコは食べることができません。山菜も一部高い状況が続いています。これは避難をしている地域の水田です(図3)。もう2年も荒らすとこのように草が



図1 2005年農家と商店で地域資源循環のふるさとづくりのNPO設立



図2 農地の空間線量マップ(2012年9月新潟大学チーム)



図3 震災後2年間米を作らずに荒れ果てた水田



図4 玄米の全袋残留農薬検査(15秒、検出限界値は12Bq/kg)

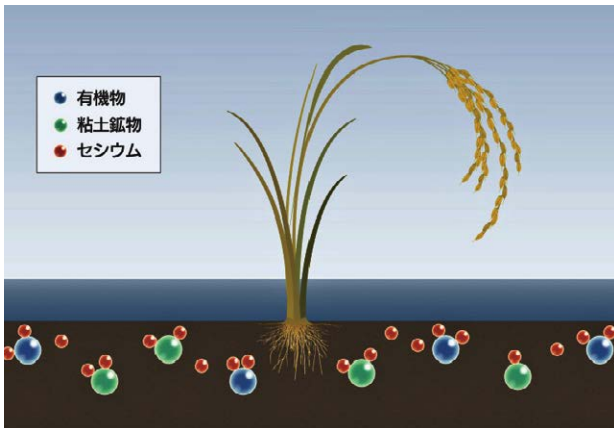
ほうぼうに生えてしまいます。果樹園は高压洗浄器による樹木の除染によって果物はほぼ不検出という状況になってきました。昨年から福島のお米はこのように30キロの袋を検査しています(図4)。これによって99.8%が25ベクレル以下ということが分かってきました。検出限界が12ベクレル以下です。

震災後の草の上の線量を測ると、1.5マイクロシーベルトでしたが、耕して堆肥を入れることによって50%線量が減ることが分かりました。そこで私は土を25センチメートル反転耕することを試みました。大学の先生と調査したのですが、今セシウムは土の表面5センチの所にあります。5センチから下にはないということです。トラクターで15センチ耕すと、きれいに分散されることが分かりました。さらに25センチの反転プラークをするとセシウムは上下横に分散されるので非常に下がることも分かりました。ここでつくった大根は2011年は17Bq/kgでした。去年と今年はほぼ不検出です。

私は今回の放射能汚染は、農家、住民、そして大学研究者との共同による見えない放射能の見える化、これが非常に重要であると思っています。この2年半、国や県による、田んぼ1枚1枚の実態調査はほとんどされていません。この大学研

究者との実証によって、有機質の土壌ほどセシウムが土に固定化されるということが見えてきました。つまり温帯モンスーンの肥沃な土壌とチェルノブイリとの土壌は違うことが見えてきました。ただ残念ながら山の汚染は深刻です。2年前の落ち葉が腐ってきて、セシウムを一緒に取り込むことが分かってきました。さらに、山から流れる水も対策が必要ということが見えてきました。このように空間線量、土壌の汚染を、大学研究者と一緒に研究によって、土が汚染されていても、玄米はND(検出限界以下)ということが検証されてきました。つまり粘土質や有機質の土壌ほどマイナスイオンが強い。セシウムはアルカリ金属のプラスイオンです。プラスとマイナスが吸着することで根から稲には吸わない。この有機的な土作りが復興の光であると思えてきました。大学研究者と土壌の調査も続けています。

天気がいいときは水はきれいなのですが、一度大雨、集中豪雨が降ると、水は10倍ぐらい濁り水で汚染されます。この濁り水を農地に入れない対策はこれからも続きます。たとえ土が汚染されていても、そしてわらやもみ殻にはセシウムが出ても、玄米には移行しないということが分かってきました。つま



セシウムの吸着固定 資料：NHK「クローズアップ現代」



長女の呼び掛けで新たに始まった農業体験



「和食 世界遺産」の新聞記事



試験田だけに現れたアカトンボ

り種を守るという米の持つ素晴らしさ、だからこそ日本に3千年も稲作文化が続いてきたのだなとあらためて感じています。さらにゼオライトよりももみ殻を用水路に設置した方がセシウムを吸着することも見えてきました。つまり、原発という化学の力で汚染されましたが、その対策は深く耕す、いい堆肥をしっかりと入れる、もみ殻や炭などの農民的な技術が有効であることが見えてきました。

次にこの間、多くの支援の方たちが福島に来ていただきました。共に田んぼで田植えをしたり、稲刈りをしたり、交流や関係を深めてきました。大学研究者、市民団体、企業との新しい関係が生まれています。市民団体の皆さんと企業の支援によって、東京にアンテナショップも立ち上げることができました。避難して酪農ができなくなった酪農家が、支援を受けて復興牧場を立ち上げることができました。今、企業の皆さんが有機質肥料を福島のために作ろうとされています。

この震災を受けて、都市と農村の新しい関係。NPO、NGOはじめ、市民団体、大学研究者、企業と、農家との新しい関係をつくっていきたいと考えています。私の娘のプログラムに

も若い人たちが参加しています。

この震災後、先輩である有機農家が試験田を作りました。原発から16キロの所です。周りが草ぼうぼうの中、その試験田にだけトンボが飛んだのです。私はこの農業の持つ価値、さまざまな生物多様性を産む価値を多くの皆さんに伝えたいと思っています。放射能に汚染され、荒れてしまった農地や山林を見るたびに、この美しい景観をつくってきたのは、まさに農業の営みであるということをつくづく感じています。

山からミネラル豊富な水が海に流れ、豊かな漁場となる、その多面的な機能をしっかり私たちは考える必要があると思っています。私の後にプレゼンをされる横山先生もおっしゃっていますが、豊かな土、有機質の多い、微生物の多い土ほどセシウムにしっかり対抗できることが分かってきました。

このたび日本の和食がユネスコから世界無形文化遺産の推薦を受けました。今、この日本型の旬の食生活が見直されています。私も家族も、内部被曝^{ばく}は不検出となっています。免疫力を高める日本型の食生活が非常に大切であると思います。この無形文化遺産の和食、この地域資源を生かして

いる農民こそ、文化遺産というべき価値があると思っています。今、福島では太陽光や水力発電、風力発電など、新しいエネルギーの転換が始まっています。私のトラクターもベジタブルオイル(天ぷらなどの廃食油)に切り替えました。

ここに来る前、12,13日にインド南東部のアラクバレーに行ってきました。千メートル級の山岳地帯の先住民のいる地域です。ここを支援しているナンディー財団の方々と一緒に、先住民の方々と交流してきました。まさに日本の田園風景と同じような棚田が広がっていました。黄色い花は食用油用の花です。まさに日本の菜の花畑と同じようでした。ここで作られているオーガニックコーヒーは福島でも販売されています。私はまさにこのアジア的循環型農業の中にこそ、新しい農民のあり方を感じています。

実は私の所にも震災前は、障がい者の皆さん、高校生が農業体験に来ていました。残念ながら、震災後は農業体験の高校生は来なくなりました。農業というのは子どもからお年寄り、障がい者も含めたコミュニティをつくる、そういう豊かな力があると思っています。アラクに行っても、子どもからお年寄りまで、牛も羊も共に豊かに生きていました。多様な作物による、多様な風景が、多様な人たちによって、豊かさがつくられる、そのように感じています。ですから、私たちアジアの農民は、家族農業、小規模農民はもっと連帯して、豊かな地域をつくっていくべきである、このように考えています。

経済優先ではなく、命を大事にした暮らしのあり方、社会の在り方を、私たちは農民の豊かな暮らしから学んで、共に連帯していくことを訴えたいと思います。



未来への挑戦： 土壌微生物多様性・活性値評価による土壌再生



横山 和成

中央農業総合研究センター 農学博士

北海道大学大学院農学研究科修了。米国コーネル大学農学・生命科学部およびボイストンソン植物科学研究所を経て、農水省管轄独立行政法人・中央農業総合研究センター情報利用研究領域上席研究員。著書「食は国家なり! 日本の農業を強くする5つのシナリオ」

はじめに：今そこにある飢餓

2010年国連食糧農業機関(FAO)より「世界飢餓マップ」が発表されました(図1)。5%から35%以上、栄養不良の人民を抱える国と地域が着色された地図です。欧米各国で先進国として認知されている国々、オセアニア、そしてアジアでは日本だけが辛うじて着色を免れています。これが、地球という惑星に暮らす人類の偽らざる姿なのです。我々は既に、飢餓と隣り合わせで生きているのです。

次に、同じくFAOが2008年に公表した「人為的土壌劣化マップ」(図2)を並べてみると、ある重要なことが見えてきます。土壌劣化マップで緑色(安定)以外の色で塗られています。つまり何らかの原因で人為的に土壌が劣化している

地域は、ほとんどが先の飢餓の地域と見事に一致します。正確に言えば、飢餓状態ではないとされるヨーロッパ、ロシア西部、オーストラリアまでもが、大半が土壌劣化の地域に色分けられ、飢餓が起きないのは単に豊かな経済状態による食料の輸入に頼っているか、明らかに自然の運行を妨げる危険な技術を用いることで、土壌を犠牲にした過酷な食糧生産が続けられているということです。その典型がアメリカ合衆国、我が国の最大の食糧依存国です。世界一豊かとされる日本の食事情、世界文化遺産に指定された誇るべき和食の足元は、こういった潜在的な危機によって支えられているのです。飢餓は遠い話でも、未来の話でも決してありません、今、そこにある現実なのです。

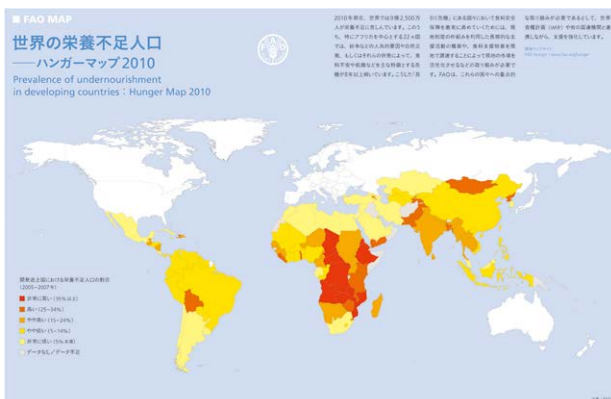


図1 世界飢餓マップ

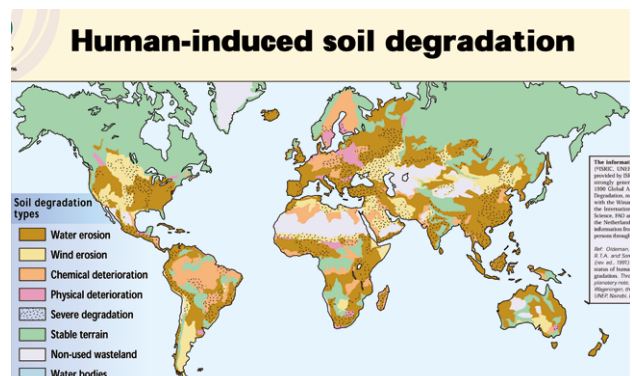


図2 人為的土壌劣化マップ

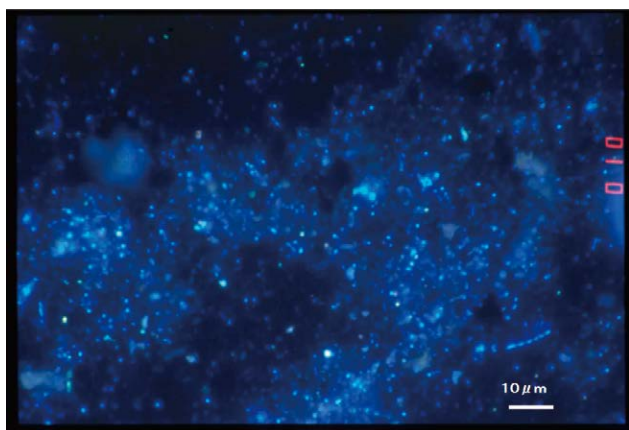


図3 蛍光顕微鏡で見る真の土壤微生物の世界

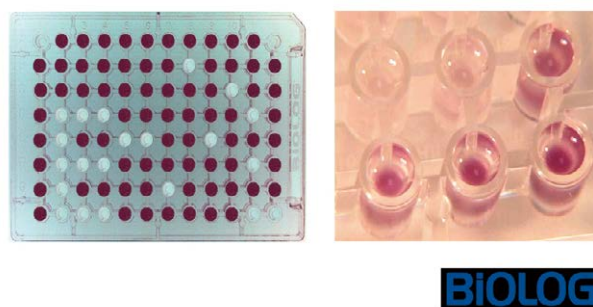


図4 簡易同定用パネル バイオログプレート

黎明期：それは1991年に始まった

私が3年間の米国勤務を終えて、農林水産省農業環境技術研究所の土壤微生物生態研究室に奉職したのが、1991年、ちょうど「地球サミット(環境と開発に関する国際連合会議)」が南米ブラジルで開かれる前年でした。そこで、赴任したばかりの私に与えられた研究テーマが、「豊かな土作りのための土壤微生物群集解析技術の開発」でした。それまで植物病害の病原菌の研究を行ってきた私は、「豊かな土づくり」という壮大な研究テーマに、茫然とさせられたことを覚えています。

ここにきて、初めて農業の基本である「豊かな土」について本格的に研究を始めたのですが、最初から巨大な壁にぶち当たりました。多くの文献や書物を調べる中で、土の豊かさとして、1.物理性、2.化学性、3.生物性という3つの性質があるのですが、「土壤微生物」はそのうち、3番目の生物性として非常に重要視されていました。しかし、どの文献、資料を見ても、「全く分からない」としか書かれていない。とにかく、数が多過ぎる、種類が多過ぎる、変化が速過ぎる、培養できない、と無い無い尽くでした。そこでまず、土壤微生物群集の生の姿を見ることから始めることにしました(図3)。

濃紺色の背景に銀河の星々と見まがう光の点の集団、ノルウェー国立ベルゲン大学で撮影した土壤微生物の生の姿です。我々が見慣れた、電子顕微鏡写真は、土壌から分離さ

れ培養された後の姿で、土の中で生きている生の姿ではありません。ベルゲン大学では、土の中の微生物を生きている状態のまま、蛍光顕微鏡で観察する技術を学びました。写っている土壤微生物をカウントしてみて驚嘆しました。1マイクログラム(100万分の1グラム)の土から観察された微生物の数は約1万、1グラム(1円玉の重さ)に換算すると、何と1兆を超える微生物が土の中で生きていることになります。まさに、土は生き物で満ち満ちているのです。また、この微生物たちのほとんどが名前など付いていない、しかも人工的に培養することが不可能な種類で、それ以上詳しく調査することすらできないのです。確かに、どの教科書を見ても「土壤微生物は全く分からない」としか書いていないはずです。私の「土壤微生物群集の解析技術開発」という無謀な挑戦の悪戦苦闘ぶりを見かねて「諦めてもっと簡単なテーマ」を勧めてくれた諸先輩方も1人や2人でありませんでした。

胎蔵期：新しい多様性概念の芽生え

土壤微生物という、それまで現代科学では取り扱えなかった巨大な存在を目の当たりにして、私を奮い立たせたのは、少年時代から絶対に周りと同調しない「へそ曲がり根性」の血でした。目の前の土壤微生物という不可知な世界に、全く違った方法で分かるようにしてやろう、そして、同時に湧き上がってきたのが、農学に転向するまで、慣れ親しんだ理論物理学の

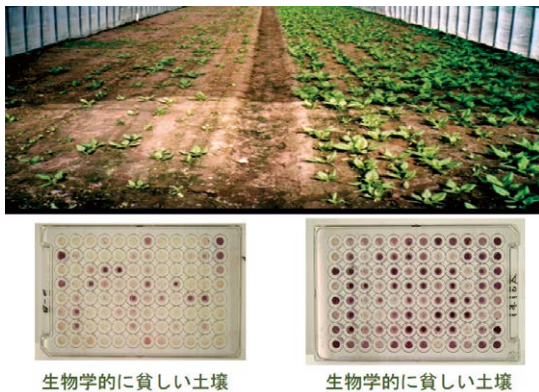


図5

世界観でした。物理の世界では、宇宙全体の成り立ちを追求するという、到底数え上げることなど不可能な巨大な世界を、理論という武器で人智の取り扱える世界に絡め捕ります。土壌微生物がいかに膨大であっても、何らかの理論の枠に収めることができれば、人間が扱えないはずがない。頭の中から「微生物=生物」という枠組みを取っ払って、「土壌微生物群集=物理的存在」として見つめ直したとき、「分からないのなら、分からなさの度合いで比べることができる」というアイデアがひらめきました。これは物理学(熱力学)の、エントロピー(乱雑さ)という概念に近いです。これを微生物群集に当てはめて「多様性」として、群集の分かりにくさを表す尺度としました。ただ、土壌微生物はまず目に見えない、種としての確固とした情報が全くない。そう言った困難な状態でも適用できる全く新しい「多様性概念」と、それを数量化するための現実の作業手順の構築が必要でした。

誕生期：Made in USA がやって来た

「種類が分からなくても多様性(分からなさの程度)は比べることができる」はずです。そして、誰がいつどんな場合に行っても同じ結果が出る、論理的な方法を用いて情報を取り出し、その結果、取り出された情報量に比例する尺度を作ってやればいい。そうやって開発された概念が「分類群非依存型多様性」であり、その数量化された指数が「多様性指数」です。

多様性指数 = 集団の有する情報量の総和の2乗 ÷ 集団の構成者数

しかし、この概念ができて、形にするためにはそれに適した道具が必要です。微生物を対象にし、しかも、論理的な情報を取り出す道具が、それまで存在しませんでした。無謀な挑戦もここまでか、と諦めかけていたとき、アメリカで細菌の簡



図6 生物学的に豊かな土が、豊かな根と豊かな作物をつくる

易同定用パネルをBiolog社が開発し、それが日本で紹介されたのです(図4)。

勃興期：不可能が可能に

Biolog社が開発した「バイオログプレート」は手のひらサイズのプラスチックプレートに、縦8列、横12列のウェル(小さな試験管)が整列し、それぞれのウェルに含まれる95種類の有機質が、細菌によって分解された際に紫色に発色します。各ウェルごとの発色パターンが、投入された細菌の有機物分解能を表し、機械的に数値化できます。この数値パターンが、新しい多様性概念で用いられる「情報」を提供し、そのパターンを比較したときに得られる「距離」が、情報量として計測されます。

この多様性指数によって、それまで膨大な作業と費用を費やしてもかなわなかった土壌微生物群集解析が可能になりました。その大きな功績が、我が国の農業現場、特に特定品目を連続して大規模に生産する、大規模野菜産地で激発していた「連作障害土壌」では、著しい土壌微生物多様性の減少を起こしていることが、数値的にも明確に確認されたのでした。

躍進期：もっと安く、もっと楽に

誕生した土壌微生物多様性指数による解析技術は、農業現場に数々の大発見をもたらしましたが、費用面での高価さ、高度に熟練した技など、普及させるには困難な問題がありました。この問題も、新たに開発した「有機物分解トレンド時系列解析技術」と、2000年代に入ってBiolog社によって発売された全自動実験ロボットシステム「オムニログPM」とのドッキングによって解決し、一度に25～50の土壌サンプルを同時に扱えるなどの作業効率面、約1週間かかっていた実験期間を3日に短縮できるスピード面、材料・人件費コストの大幅減少面を総合すると、約2千倍以上の効率化を達成したのです。

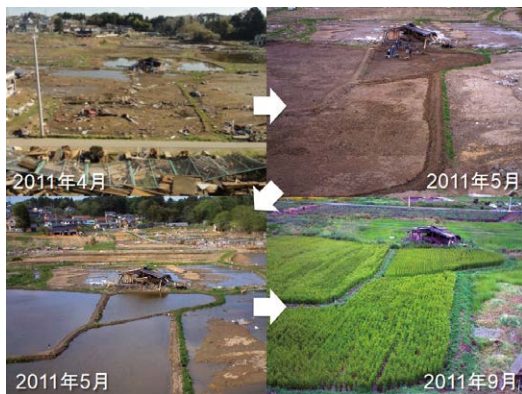


図7 震災後 復活した水田



図8 被災地に再び福と幸が訪れることを願って名づけられた「福幸米」

名付けて「土壌微生物多様性・活性値」評価技術は、2009年から事業化され、費用的にも生産者個人が試しに行くことが可能な範囲まで低下したことから、今では現場のニーズに十分対応できるまでに至っています。

展開期：舞台は世界へ

国内の農業生産現場における連作障害土壌の微生物多様性減少の実証(図5)、行きすぎた化学肥料や危険な農薬の使用による土壌微生物多様性の激減、高品質の作物には多様性豊かな土壌がまず必要であることの科学的実証(図6)を経て、この技術は既に国境を越え世界への展開を果たしつつあります。南米での極端な土壌微生物多様性減少は、行き過ぎた大規模化、収奪型農業の行き着く先を暗示し、逆に、ブラジルでの取り組みでは、自然に配慮した農業生産が、その多様性減少に歯止めをかけることをはっきりと示しています。このことから、我々の世代が引き起こしてしまった飢餓、この将来の世代への付け回しを許されない災厄を防ぐ手だては、もう一度原点に戻った豊かな土づくりであり、そのための科学的、戦略的土壌保全の取り組みであることは、もはや議論の余地はありません。

最後に、東日本大震災で見舞われた津波災害の復興現場をご覧ください。完膚なきまでにたたきつぶされた水田を、一つ一つ生産者自らと、全国から集まった援助者の手で、あっという間に復活させました(図7)。この原動力はどこから出てきたのか？ 驚いたことに、表面を覆う土、津波によって海から運ばれた土が、元々の表土よりも多様性が高い、つまり水田土壌は津波の襲来によって良くなったのです。こんな情報が、諦めかけていた生産者の勇気を奮い起こしました。「農業を諦める必要はない。自分たちの田んぼは、海によって生まれ変わって、豊かになったのだ!」、「前よりも豊かになった

田んぼでできた。もっとおいしい俺たちの米を早く食いたい!」こんな素朴だけど強烈な意志が働いて、気が遠くなりそうな破壊の野から、農地を見事に復活させたのです。そして、彼らの思いは見事に報われました。その年の秋に実った米は、それ以前よりも豊作で、味も良く、高品質でした。その米は、関わった皆の思いを込めて、「福幸米」と名付けられ、全国各地の農業を愛する人々に笑顔を届けています。

おわりに：自然は全てを教えている

本稿のテーマ「未来への挑戦」の成否を分ける鍵は明らかです。人類が地球上に歴史を刻み続ける限り、変わることなく永続する真理、それは、「自然に逆らわない持続的農業が育む豊かな土、土壌微生物の多様性に守られた土壌が、人類の生存にとってもまた豊かさと永続性の根源である」ということです。その真理に照らして、自らの農作業が正しいか否かを知りたいければ、「ちょっと試しに」土壌微生物に聞いてみることです。答えは明確に、しかも厳然として出ます。その答えを前にしたとき、悠久の歴史の中で絶え間ない土作りを重ねてきた先人たちの思い、彼らが未来の世代(我々)に託した願いについて、もっと真摯^{しんし}になっていただきたい。そして、我々も、さらに未来の世代に土壌という人類の宝物を託すために、自らの農業を正しい方向に導いていく賢明さを身に付けていってくれることを祈りたいと思います。それが、この技術を生み出した者の、偽らない思い、全ての同胞(地球人)たちへの願いです。

(図7、8は、NPO法人田んぼ 岩渕成紀理事長から提供)

「危機」と「利他」 ～災害から私たちが学ぶこと～



薄羽 美江

(プロデューサー)

国内外企業の人材開発に長年従事し、企業文化面から組織効率向上の経営コンサルタントを行う。また、過去・現在・未来を通観するVISIONARY INSTITUTEを2010年より展開。東北巡回写真展『White Gift』を2011年よりプロデュース。

リサ・ヴォート

(写真家)

異文化コミュニケーターとして新聞・ラジオなど広く活躍、著作も多い。青山学院大学、明治大学にて教鞭を執る一方、写真家として活躍。世界の6大陸50カ国以上を旅し続けて、地球の自然や動物、町や人を撮り続けている。

本日は、Reimagining -新しくイメージを持ち、Vision -未来へのヴィジョンを抱き、私たちの想像力を働かせる、という観点から2つのことをお伝えしたいと思います。1つは「危機」- KIKI。もう1つは「利他」- RITA。

この2つのアイデアの核心と物語が、私たちにどのような価値をもたらすのか、未来に何を生み出す可能性を秘めているのかを考えます。そしてKIKIとRITAに関わる2つのプロジェクトを紹介します。『White Gift -ホワイトギフト』とそのコンセプト『Book for Two -ブックフォーツー』。もう一つが『森の長城プロジェクト』です。危機と利他の考え方から『White Gift』と『Book for Two』はその心の発動について。『森の長城プロジェクト』はプラクティカルな実践の事例として。そのどちらも、未来のこと、次世代の子どもたちのことを念頭に置いています。

DISASTER -災害

災害が起きたときには実に多くのものが失われます。元には戻れない。その事実、本当につらいことです。しかし、生き残っている者は、前を向いて生きなくてはなりません。悲しい、本当に大変なことです。乗り越えなくてはならないのがDISASTER -災害です。どのように未来に向かって前進すればよいのでしょうか。

人類は何度もこのサイクルを繰り返しています。

Rebirth -生まれ変わるということ。全てのものは自然界と同じようにさまざまなことが起きて巡りゆきます。人類は、永い間さまざまな災害に遭い、そのたびごとに対処してきているのです。チャレンジは、このネガティブな出来事をどのようにポジティブなことにしていけるかということではないでしょうか。

日本語で、「危機-CRISIS」というのは二つの言葉でできているとみることができます。「危機」-「危」 Dangerと「機」 Opportunity の意味があります。危機をどのように受け止め、危機から何を生み出すかは、私たち次第です。その都度、学び、前に進む。危機というのは善なることへの機会であって、一握りの人たちにとつてだけの経済的チャンスや権力を得るというようなことでは決してありません。広く皆にとって、危機がチャンスとならなくてはなりません。

危機というのは再生の機会。再び生まれるための「種」だと思います。今までに無かったものが物質化するための貴い機会なのです。KIKIこそ、それまでに過去に無かった何かが生まれ、過去よりより良いものが誕生する機会とする。それは、忘れかけていたことを再び目覚めさせる、Forgotten → Reawakened そこにawakeという「目覚め」が含まれています。昔の叡智、忘れられていたことが、再び目覚めさせられるということです。それは、眠りから覚めて、目を見開いて目の前のことを見ようとするにつながるものです。



写真展「White Gift ホワイトギフト」宮城県石巻市石巻中央公民館にて



3.11 の大地震と大津波

災害の直後に、最初に生命を保持するために必要となるのは「Food - 食べ物」「Water - 水」、そして「シェルター（守られて住む所）」です。最初はそういうものが必需品ですが、その次の段階で生命のために必要となるのは、内なる魂や心を豊かに満たすための栄養です。それは、Inspiration - インスピレーションであったり、Hope - 希望を抱く物語や知恵のようなものとなるでしょう。実際にも、衣食住の提供の後に、被災地の方々の多くが精神的支援を求めました。

私たちは、過去、多くの北極のポーラーベア（シロクマ）の写真撮影し、その写真集を2008年に発刊していただいております。その写真集が今回の東日本大震災3.11後、被災地の方々に数多く献本されることとなったのです。

1. White Gift - ホワイトギフト

『White Gift - ホワイトギフト』というのは北極にすむポーラーベア（シロクマ）の写真集のタイトルであり、そこからイベントのタイトルとなったものです。Gift - ギフトというのは「今、ここ」というPresent - 贈りものです（Presentの英語の意味は「現在」）。過去 - Pastは過ぎたこと、まだ見知らぬのがFuture - 未来。ですから、今あることそのものがプレゼント。今、まさに贈られているというものをGift - 天からの贈りもの、ギフトと呼びます。今、我々がすべきこと、「今」こそが貴重、プレシャスなのです。

3.11後のこの時機だからこそ、富士フィルムのギャラリーからご依頼いただき、過酷な北極にすむシロクマたちの愛ある温かな姿を写真展示することになりました。そもそも、昔々、茶色い熊だった熊がどんどん北上して白い熊になりました。

森にいれば川に魚もいて暖かくてすみやすかったでしょう。けれども、わざわざ長い時間をかけて、過酷な北極に北上していったのがシロクマたちなのです。

私たちは、この富士フィルムのご要請から東京で写真展とイベントを企画・制作しました。その開催後、それが、その後に3.11の被災で大変だった東北エリアを巡回して写真展を開催することにつながっていきました。よりダイナミックな写真展催事になるよう、実寸大のシロクマフィギュアや、着ぐるみのシロクマも登場させました。それは、衣食住の後の、心のケアとして実施されることとなったのです。

東京の富士フィルムギャラリーから始まり「危機」こそが人をつなげたり、感情を外に出して絵やメッセージを描く創造的な良い機会となっていきました。たくさんのカラフルなクレヨンが寄附されて、真っ白い大きな壁に広がるキャンバスに、大人も子どもも、思い切り絵を描く機会を展開していきました。

それは、皆が描いた作品を皆が見るという機会となり、それ



を見聞して分かち合う機会ともなっていました。何か内側にあるものと、外側にあるものがつながり合う機会となりました。外の人たち、見つめる人たち、絵を描いた人たち、それぞれが心触れ合ったり、共感したり、違う視点をお互いに学んだり……そうか! と思うような機会を、3.11という「危機」こそがつくり出すこととなったのです。

2. Book for Two

東京で写真展『White Gift』を開催している間にふと、お客さまとの交流の中で素晴らしいアイデアを思いつきました。北極シロクマと南極ペンギンの写真を地球丸ごと1冊に納めた写真集『北極シロクマ南極ペンギン』や『White Gift - ホワイトギフト』の写真集を、来場された方々がたくさんお買い求めくださいました。そこで、1冊の本を買うと、同じ本がもう1冊用意できるように版元さんに慈善をお願いし、1冊の写真集を自分のために買い求めるともう1冊の献本が自動的に用意され、被災地で望まれる方に贈ることができるという仕掛けを行いました。そこで、写真集をお求めくださった方にシロクマ写真のポストカードを渡し、宛先にご自分のご住所とお名前を書いていただいて、献本の際にそのカードに被災地の方たちから受領のメッセージを記していただいて、贈り主の元に返送するというシステムを構築しました。結局、東京の写真展で500名に上る方々が写真集をお求めくださり、その倍の500名の東北の被災地の方々に写真集をお贈りすることができました。思えば1000名の方々と心の絆を分かち合うことができたわけです。

それは「つながり」として、今までにない心の交流が生まれることになりました。これは、シロクマ着ぐるみくんが、被災地の仮設の幼稚園で、一人ひとりの園児さんたちに、贈られた写真集を一冊一冊手渡ししているところです。みんな、笑顔満面です。

分かち合う。シェアリング。知らない人が知らない人に本を買う。受け取った人がポストカードにつながる。「ご本をありがとうございました」と心を伝え、ケアリング—誰かが誰かを思い、誰かに思われていると思う「つながり」が生まれる。あなたが誰かのことを思っていると同時に、あなた自身も思われているということ—が生み出されていったのです。また、献本を贈った人の元にはがきが返送されていくうちに、献本を受け取った被災地の方のはがきに寄せたさまざまなコメントが、そのはがきを受け取った人たちを大いに勇気づけるということが広がっていきました。人は人を励ますことで、お互いに元気になるものです。



私たちは、幼稚園や仮設住宅など、いろいろな所に出向いていきました。皆の気持ちをBook for Two という精神で届けていきました。子どもたちが献本された『北極シロクマ 南極ペンギン』の写真集を手にして、自分たちが目の前にしている日常から離れて、遠く地球の北極と南極の世界を知ること。地球にはまだまだ知らない所があって、広くて大きい世界があるんだというメッセージを伝えていきました。

東京から北へ北へ。海沿いに津波のあった所、原発の風評被害のあった所など、被災地8カ所を巡りました。石巻では、最も古い公民館を、北極の世界のような真っ白い床・壁・椅子・机の設いで包み込み、来場された市民の皆さんを驚かせました。多くのボランティアの方たちの「利他」の心で会場が仕上がっていったのです。100人以上のボランティアが集まって、その善意から本当に「石巻の市民の皆さんに楽しんでいただきたい。心からこの空間の喜びを分かち合いたい」と思うからこそ、このような空間を作ることができました。「利他」の心がなければ決してできなかったことです。「利他」ゆえに実現しました。この「利他」とは何でしょう？

災害を機に、他者を思う「利他」の心が生まれ結ばれました。「利他」とは、あなたと私の境界線が無くなり、自分のためというよりも、自他一つになって、「何が必要?」と尋ね、必要といわれたものを望んで行動に移すこととなったものです。お互いからいろいろな学びを得ることができ、災害というのは誰にでもどこでも起こり得る、地球上、私たちは皆つながり合っていて、どこでも同じなのであるということを教えられる機会となったのです。

町一番の古い建物を、清浄な真っ白い北極の世界に作り上げ、たくさんの人々がやって来て、皆一つになって、そのワンネスがとても特別なものとなりました。ワンバイブレーション・イン・ワンモーメント(1つの瞬間に1つの周波数が作り上げら



れる)。将来にも、皆の心の中に、あんなにたくさんの人たちが来てくれた、自分は一人ではなくて、皆と共にそこで同じ時間を過ごしていたという実感が思い出になれば喜ばしいと思います。会場内で大いにはしゃいで、飛び回って元気に遊んでいた子どもたちの姿。それは、将来にも、本当に困ったときには誰かが助けに来てくれるという、心の中に確かな信頼の「種」が蒔かれたと信じたいと思います。

日本のコミュニケーションでは、「抱き合う」というHug - ハグの文化がありません。お辞儀の文化です。でも、この場では、シロクマ着ぐるみがビッグハグをして来場者一人ひとりをふんわり包み込みました。着ぐるみの真っ白でふわふわの質感。それは、肌と肌の接触の触れ合いを超えた、魂と魂の触れ合いです。最初は大人と。それから子どもたちと。ご覧いただいている写真のように、輝くばかりのうれしい笑顔があふれるビッグハグが次々に行われ、笑顔の連鎖と歓声が次々に広がりました。

ここには「物語」が立ち上がっていきました。全てがゼロから始まらなくてはならなくなった、それまで当たり前だと思っていたことが一瞬にして全てが変わってしまう、想像すらできなかった状況を経て、ある親御さんがおっしゃいました。「災害によって何もかもが失われ、それまでに撮影した家族の記念写真が一枚も無くなってしまった。アルバムも何もかも流されて思い出まで皆失われてしまったけれど、今日はこの会場で、子どもが満面の笑みでシロクマに抱かれて、写真を撮ることができた。被災後、写真を撮る気持ちにもなれなかったけれど、今日はこれからの新しいアルバムの最初の1ページを作ることができた。今日は来てくれてありがとう」と。私たちは涙が止まりませんでした。シロクマくんのビッグハグが、震災によって手元に思い出写真が一枚も無くなってしまった人たちの新たな人生のスタートとなったことは、なにより幸いでした。

また、福島の写真展では、会場で北極の写真をご覧になっていたご年配のおばあちゃんが語り掛けてくださいました。「本当に必要なものって、ほんのわずかなのよね。津波に何もかも持っていかれちゃって、何もかも失ったけれど、北極の写真を見ていたら、自分の価値観をもう一度考え直すきっかけになったのよ。何も無ければ本当のことが見えてくるからね。今日はありがとうね」と。私たちは思いもよらないコメントに、再び、涙しました。

北極は自然だけ。物質が何もない場所。あるがままにこうしているだけで本当にありがたいと気付く。そのおばあちゃんに、そうおっしゃっていただくことによって、私たちはまた、その存在の尊さやありがたさを深く感じ、魂が震える瞬間を知りました。

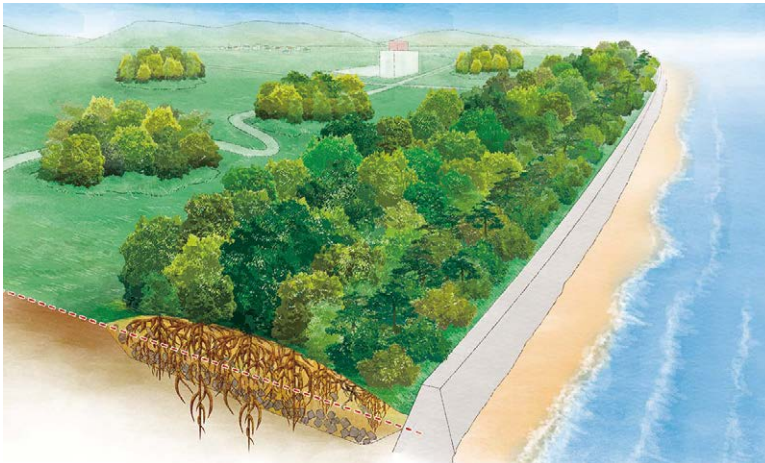
こうしたコメントの数々は、私たちの魂への終生忘れられない滋養となりました。3.11が無ければ、この「利他」の目覚めによる恩恵は無かったことでしょう。本来は私たちの内側にあったのかもしれないけれど、価値観を見直すことや、今あるがままに本当に感謝するということ、そして、魂が触れ合い、さまざまな真実に思い至り、感じ取るということは、災害というネガティブがあってもこそ深まり広がり、「危機」をチャンスとして、ポジティブに変わっていく物事の変遷を見つめることになりました。

「利他」というのは、魂と魂が触れ合うこと。つながること。振り返ること。災害があったから、これらの「利他」が呼び起こされました。「危機」の「機」というオポチュニティー—魂の記憶を呼び覚ます機会となりました。それは「絆」という、これまでに無かったつながりが生まれ出ることにもなりました。人と人をつなげるもの。リンクし触れ合うもの。それは糸偏に半分半分のあなたと私がつながることの象徴でもあります。

3. 森の長城プロジェクト

これまでお話しさせていただいた「危機」から生まれたプロジェクト。それはまさに「木」を「機」とするプロジェクトへと発展していきます。それは『一瓦礫を活かす— 森の長城プロジェクト』です。

これは、昔からその地にある在来種のドングリを拾って苗木に育て、豊かな千年の森をつくるというプロジェクトです。津波が来て、全部海に引かれて持っていかれてしまった。その経験の学びから、土地の瓦礫を集めて小山のマウンドを作り、30cmほどの苗木を植えていき、その瓦礫の隙間に根が張り、東北沿岸300kmに森の防潮堤を造ることがプロジェクトの目標です。



森の長城プロジェクト 森の防潮堤のイメージ



植えられた苗木

現在、これまでに東北の巡回展で献本をしてきた『北極シロクマ 南極ペンギン』の写真集が再版され、1冊買い求めていると1本の苗木がこのプロジェクトに贈られるというギフトが推進されています。このようなプロジェクトに携わることができるのも、3.11があったからです。感謝の気持ちでいっぱいになります。その目的、意味を実践するということ。こういうことがなければ、自分たちが日ごろ、どのような意味あることをしていたか、自分一人でもできたかどうか。そのようなことを謙虚に再考する貴重な機会を頂くことができたことに、私たちは感謝でいっぱいになります。

リスペクト＝尊敬をするということは、とても大事であると思います。震災後、被災地に残された瓦礫は、決してゴミではありません。瓦礫はその土地で生活を営んできた方々の思い出と精神、魂が詰まっている、とても貴いものです。その土地の方々の思いが積もっているもの。そこにリスペクトをもって接すること。その地に保たれることが、その場のスピリットを根付かせることになることでしょう。人々が苗木を植える。子ども、おじいちゃん、おばあちゃんも、お父さん、お母さんも、孫、ひ孫にいたるまで、次の津波が来るときには、未来、皆の生命が森の防潮堤によって守られるのだという物語が受け継がれていくのです。代々語り継がれる千年の森をつくる。それは、未来に継承される大切な財産となります。

子どもたちが苗木を植えるとき、きっと苗木の気持ちを感じることでしょう。苗木と話をしながら植えるかもしれません。きっと苗木と一つになるでしょう。自然に秘められた力や不思議を体験する。そのような小さな苗木を植えるという営みの経験は、もしも木が痛めつけられたら、私たちまで傷つけられるというような、自然と共にある共感が生まれることに必ずつながることでしょう。このような災害がなければ、日常はとてもノイズが多いものですから、大切なことになかなか気付く機会が与

えられないこともあるでしょう。だから、このように津波に流されて何も無くなってしまったからこそ、あらためて本当のことを感じたり、見たり、聞いたり、気付いたりすることができる。そこに、それまでの日常には無かった非日常によって、多くの気づきが与えられるのだと、私たちは学ぶことができます。それは、それまでに感じる事が無かった、新たな想像力と創造力を与えられる機会となるものです。

本シンポジウムは「The Human Nature Relationship」と名付けられています。その土地に根付いていない樹木が津波に根こそぎ持っていかれてしまったという、そのような自然界の法則から私たちはあらためて学ぶことがあります。自然に全て答えがあるのです。そこにもともとあった在来種、古来種をその土地に植えることによって根付くという、その土地の力を信頼する。自然と共に、自然の一部として、再び統合されて一つになるということ。私たちが自然の一部であり、自然の中に含まれているということを学ぶことができると思います。

『White Gift』、そして『Book for Two』によって、人と人との間にHumanな発見を与えられました。『森の長城プロジェクト』を通じて、Natureを学ぶことができます。KIKIは「危機」。どのようなこともチャンスとしてポジティブになっていく叡智を生み出していくということ。RITAは「利他」。何が自分にできるのかをフォーカスし、ワンネスとシェアリング、ケアリングを通じて、あなたと私は一つである、同じであるということに目覚めさせられます。共にあるのだということに気付かされます。

先ほどの津波のビデオを見ても、他人事ではなく、自分に起きたかもしれないという一体感が無ければ、災害を生み続けてしまうでしょう。その連帯意識が必要ではないでしょうか。これまでになかったことが新しく創造されるのです。何かが再び目覚めるのです。災害から何かより良ことを再び生み出すのです。

日本古来の自然観から学ぶライフスタイル



アラン・今井

秀明インターナショナル
開発途上国担当 理事

島根大学農学部卒。秀明インターナショナル開発途上国担当理事として、ザンビア、トルコ、ブラジル、フィリピンなどで秀明自然農法の普及にあたる。「環境と精神性」をモットーに活動する秀明国際交流センター（Shumei International Institute）所長。

私は秀明自然農法を通して17年近く、アメリカ、ヨーロッパ及び開発途上国、ザンビア、フィリピン、ブラジルなどの農民たちと関わってまいりました。今日は東日本大震災と津波、その復興を考える上で秀明自然農法という生き方の中に、そのあるべき方向性を示唆するものがあるのではないか、そしてひいては今後日本が世界に向けて食の問題や環境の問題に対して貢献できる、大切なメッセージを包含しているのではないか、ということをお話したいと思います。

私はこの自然農法が日本で生まれた背景に、1万3千年以上にわたってそこに暮らした人々の自然観があると思います。世界的に“オーガニック”という言葉は近年しっかりと定着し、その社会的地位も確立されてきたように思います。一方、“ナチュラル”というとオーガニックの認定を取得できないために、そのごまかしとして使っているような、一段階下の農法であると受け止められることが多いです。福岡正信氏の「わら一本の革命」という本が英訳され、ごく一部の人の間でそのユニークな自然観と農法に注目されている程度です。日本ではアトピー性皮膚炎や化学物質過敏症といった現代病の典型に苦しむ人たちに唯一摂取できる食品として、自然農法が注目されるようになり、現代では有機農業とは別にその地位が確立されつつあります。「有機農業と自然農法はどう違うのですか？」との質問をよく受けます。どちらも化学肥料、農薬などに頼った、そしてその果てに遺伝子組

み換え種子という自然界では起こり得ない種子を生み出してしまった慣行農業の方法に対して、人間にも環境にも優しい農業の方法を提唱し、その普及を目指している点では同じです。多少の方法論の違いよりも、そのオリジンの違いから論考することが大切だと私は考えます。有機農業は化学肥料、農薬等により私たちの環境、私たちの健康に大きな問題を引き起こしてしまっている現状に対して、化学物質ではなく有機の物質を用いるところから始まりました。一方自然農法は、自然の森では人為的な肥料は一切加えないのに、千年、2千年の大木が育っているのを眺めて、自然は完璧であるとの前提の下に、その自然の姿から学んで私たちの作物生産の場である田んぼや畑においても、人智の関わりを最小限にして自然の営みを再現しつつ作物生産を行おうとするところから生まれました。ですから、有機農業と自然農法の一歩の違いというのは、その自然観の違いにあると考えます。

秀明自然農法の根本理念は『自然順応、自然尊重』ということであり、特に先進国と呼ばれる国々においてはごく一部の農民が大半の消費者を支える形になっていますが、単に農業者のみならず消費者も含めて、いかに自然に順応した生き方をするかということがその活動のテーマとなっています。

それでは、自然農法を生み出した日本人の自然観について3つの例を紹介します。まず1つ目は自然食料理人、船



ザンビア自然農法プロジェクト

越康弘氏の体験、2つ目に国際日本文化研究センターの元所長、梅原猛、山折哲雄両氏から日本の自然とそこに生まれた日本人の自然観について、最後は、このたびの震災の地に生まれた教育者、詩人、童話作家である、宮沢賢治からです。

自然食料理人、船越康弘氏は1986年日本の山奥で自然食の宿「百姓屋敷わら」をスタート。自然食は単なる健康志向ではなく、「おいしく・楽しく・ありがたく」をモットーに幸せと感謝の生き方の進化発展を目指しておられました。やがて心も身体も癒やされる宿として人気を集め、全国各地から年間3千人が訪れる民宿となりました。2000年春、日本での実績を捨てて家族と共にニュージーランドに移住、「わらNZ」を開業し成功されました。6年半のニュージーランド滞在を終え、2006年12月より再び日本に拠点を移し、「百姓屋敷わら」を営業しながら、食と幸せに関する講演、出版、料理教室などを行っておられます。

氏がニュージーランドに渡って、日本での経験を生かしてニンジン調理するのですが、どうしても日本にいたときのようなニンジンの味が出せなかった。プロの料理人としてお客さまに出せる料理を作るために2年近くかかったといいます。ニュージーランドは日本に比べるとはるかに化学肥料・農薬の使用量は少ない。そういう意味では日本のニンジンに比べると質も良いはずなのに、味が出せない。氏の言葉を借りると「力はあるが根性がない」のだそうです。ニュージーランドに渡って1年半くらいたったころ、日本に帰りました。日本のスーパーマーケットで山と積まれたニンジンをふと見たとき、ニンジンが「やあ!」と声を掛けてきたような気がしたそうで

す。その時気が付いたことは、日本の農家はたとえ農薬や化学肥料を使っている慣行農業であっても、栽培中に野菜に声を掛けています。ニュージーランドのニンジンには全く声を掛けてもらっていない。それでニンジンがひねくれているのだそうです。それが分かったとき、自分自身畑に行きニンジンに話し掛け、ニュージーランドの農家にも話し掛けてもらうようお願いして、日本にいたときのような味を出せるようになったとのことです。

ではそういう日本の農家とニュージーランドの農家との違いはどこから来たのでしょうか。ニュージーランドは緑に覆われた美しい国というイメージがあるのですが、ニュージーランドへヨーロッパからの入植が始まってわずか150年で、多くの森林が伐採され牧草地に変えられていきました。緑は緑でも人工的に作られた自然です。現在、森林は国土面積の27パーセントしかありません。

船越氏によれば、その森林伐採はヨーロッパから入植した人たちのキリスト教的自然観によるものではなかろうかということです。それに比べて日本では都会を出て少し行くと森があります。そこに大きな木でもあるとそれを神としてあがめ、しめ縄を張って、神域と我々の住む現世とを隔てる結界を作ったりします。そうした日本人の自然観が現代の農家の心の奥深くにも脈々と生きており、自然の命と私たちの命のつながり観が、そうした日本の農家の野菜に対する接し方を生み出しているのではないかと思います。

では日本の自然とそこに暮らしてきた人々の自然観について考えてみたいと思います。環境破壊が問題視されている今日でも、日本の国土の約7割が森林、そしてその森林の6

割が自然林として残されています。

元国際日本文化研究センター所長で宗教学者の山折哲雄氏はイスラエルを旅したときの感想を次のように述べています。「イスラエルに行き、イエス・キリストが歩いた道をたどる旅をしてきました。ナザレからガリラヤ湖を越え、エルサレムに至るまで、その風景を見ながら、宗教、自然、人間の営みなどに思いをはせました。イスラエルの風景や風土がどんなものであるか、すでに書物で知っていましたが、実際に行って、自分の目で見てみると、想像していたものとはまた違う発見に出会いました。最も印象に残り、驚いたのが、砂漠の風景でした。どこまでも荒涼とした大地が続いて、そこには地上に頼るものが何一つない。唯一の救いは、天上の彼方に神がいるという他はないということでした。一神教の世界が成立する最も重要な契機は、この砂漠にこそあるとイスラエルの旅を通じて実感しました。

それから日本に帰ってきて、イスラエルとの自然の違いにあらためて気付かされました。日本の地上は、緑に覆われ、川が流れ、豊かな自然に満ち溢れていて、天上に唯一の神を求める必要がないのです。樹木の生い茂る山の彼方から神の声が聞こえる。それはやがて先祖の声にもなる。地上の至る所に神や仏の気配を感じることができるのです。そのようにして、私たちの民族は千年、2千年、いやそれ以上長い間、生活してきました。砂漠の中で天上の神を信じる他に、生きようがなかったイスラエルの人々とは違い、私たちの祖先は、あらゆる自然の中に神を見出すことができた。多神教が生まれる風土に生きていたのだといえます」。

国際日本文化研究センターの創立者で、哲学者梅原猛氏は次のようにおっしゃっています。

「自然には霊があり、至る所自然が生きている―。それをイギリスの人類学者エドワード・B・タイラーは"アニミズム"と名付けました。このアニミズムというのは狩猟採集時代の世界共通の分化ではないかと思います。農耕や牧畜の前の段階において、人類が長い間狩猟採集民であったことは間違いありません。その原初文化といわれるのは、アニミズムであった。あらゆるものに霊が宿り、神が至る所にいる、という思想だった―ということになるでしょう」。

「この思想が日本の場合には、神道として発展します。山には山の神がおり、海には海の神がいる。雷も神であり、狼も人間を超えた、すごい力を持っている。それらの自然の力を備えた神として祭りあがめることによって、自分たちの味方にする……。それが日本の神道です」。



日本に稲作が伝えられたのは3千年くらい前といわれていますが、その以前に約1万年にもわたって、狩猟採集の時代がありました。縄文文化と呼ばれています。日本は周囲が海、漁労採集文化として日本では豊かに発展しました。

梅原氏：「私は、この自然に恵まれた日本に生まれたせいなのかもしれませんが、"自然は生きている"と強く思うのです。人間と共に、動物も植物も生きている、あるいは地球そのものが生きている、と思うのです。いろんな植物がいて、いろんな動物がいて、生きている世界。その生きた命の世界を、単なる自然科学的法則に従う物質世界と見なしてよいのでしょうか。私は大いに疑問を感じざるを得ません」。

「人間は、動物や植物を取らず一食べるためにも、利用するためにも―には生きていけません。けれど、全くそれらの命をとることが罪ではないと認識しているのと、どこかで罪であると感じているのとでは、随分と違います。このような時代に、生きとし生けるもの全てと共存する哲学が、人類の哲学の根本にならなければならない、と強く思います」。

宮沢賢治は教育者、詩人、童話作家として日本における最も愛された作家の一人です。賢治は1896年このたびの地震に見舞われた東北地方、岩手県に生まれました。彼の生まれるわずか2カ月前、明治三陸地震と津波がありました、9千戸の家屋が壊され2万2千名の命が奪われました。また当時東北地方では度重なる冷害で農業は大変な被害に見舞われ、農民たちの貧困は想像を絶するものでした。彼の人生の時間のほとんどは強い仏教信仰に根差し、貧しい農民たちを支えるためにささげられたといえるでしょう。1933



年、昭和三陸地震が彼の故郷地域を襲い、賢治は彼のほとんどの時間を農民たちの復興のためにささげられたと言います。その半年後、1993年9月、37歳にして賢治は急性肺炎のためにこの世を去りました。

賢治の童話では、鉱物も植物、動物も全てのものが利他の心を持っていて、心を通わせているものとして描かれています。植物で柏、柳、銀杏。動物では蛙、ヨタカ、山猫や熊などが主人公として登場します。そこは流転の世界であり、弱肉強食の世界でありながら、生き物たちはいつも他者への思いやりの心を持っていて、いつも自らを他者にささげようとしています。

賢治は次のように言っています。「ただひとつどうしても棄てられない問題は、たとえば宇宙意思といふやうなものがあってあらゆる生物をほんとうの幸福に齎したいと考えているものか、それとも世界が偶然盲目的なものか、という所謂信仰と科学とのいづれによって行くべきかという場合、私はどうしても前者だといふのです」。

「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」

「正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである」

賢治のたくさんの作品に触れることから、自然に対する現代人の傲慢さを知り、人と動物、植物、地球、宇宙の関係を捉え直す、新たな世界観への方向付けを、読み取ること

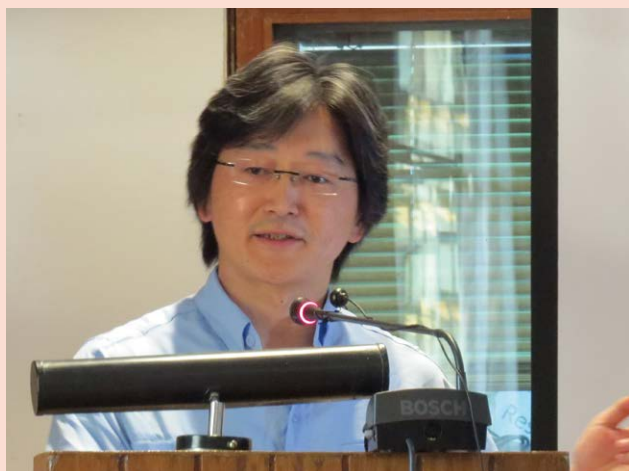
ができるでしょう。宮沢賢治の作品の中にはかつての日本人が持っていた懐かしい自然観が溢れているように私は思います。

環境考古学者の安田喜憲^{よしのり}氏も言っていますが、第二次世界大戦の敗戦によって、日本を無謀な戦争に追いやった精神的基盤に当時の国家神道があるとされ、神道は哲学を語れなくなってしまいました。そして戦後の高度経済成長期を境として、伝統的な自然観、多神教の哲学や宗教を急速に損失していきました。日本人は日本古来の伝統的な哲学や環境観を拒否し、西洋の哲学にのめり込み、独自の思想と哲学のないエコノミックアニマルになった。そして、日本の経済成長の背後に世界の熱帯林や亜寒帯林の破壊という大きな問題も引き起こしてしまいました。

今日のテーマである震災後の復興の在り方を考える今、日本人にとって必要なことは、神道が営々と築き上げてきた自然と共生する環境観に立脚した哲学の重要性を再認識し、地球と人類のために役立てていくことではないでしょうか。

私たちは日本古来の自然観が生み出した『自然順応、自然尊重』の秀明自然農法活動を通して、日本人には独自の自然観を再認識させ、またそれを海外に輸出することを通して、今日まで物質文化の発展に大きく貢献してきた西洋哲学と共存し調和させて、真に人類文化の発展に寄与していきたいと考えております。

分科会 ユース発表



会議2日目に行われたユースセッションでは、いろいろなバックグラウンドを持ったインド青年たちが集まり、発表や質疑応答など活発に意見交換がされた。その中で Shumei ユース代表の小山昌英(写真左)が日本の若者について語った。

最近の一般的な日本の若者は、幼いころから良い学歴を得るという競争にさらされ、心の安らぐ場を得られていません。その競争を通じて人生の目的は、より良い収入を得て、安定した生活を得る事であると考え、安定した公務員または大企業への就職を目指すことが彼らの人生にとっての最大の重要事であり、それ以外の自分たちの可能性については想像すらできないのです。またそのようなことに対して、心の奥底では「何かが違う!」と感じているのが、一般的な若者の心情だと推測します。

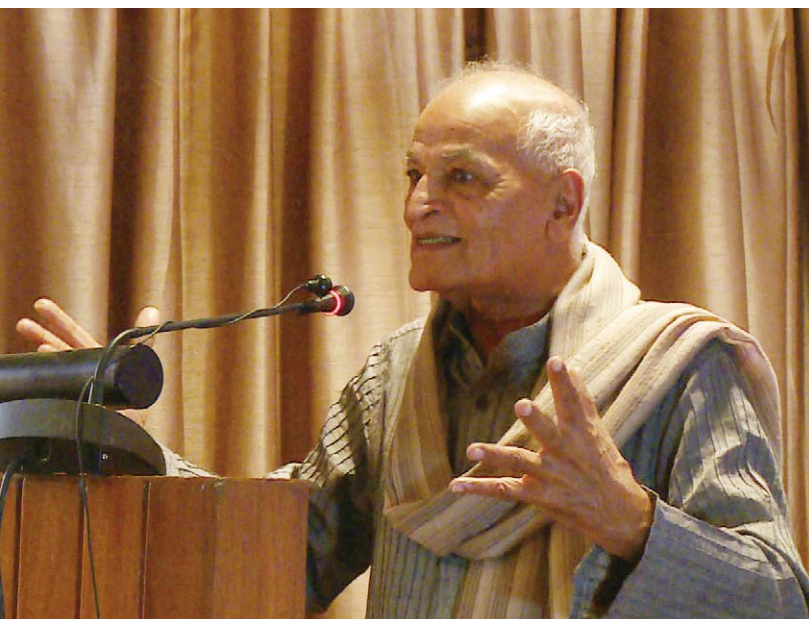
津波の後、Shumei の青年はボランティアとして被災地を訪ねました。Shumei の青年は食材を持ち込み、食事を作って被災者に振る舞いました。最初、彼らはただ食事を作れば喜ばれると思っていたのです。しかし、被災者の現実とは異なっていました。彼らは食事を取ろうとはしませんでした。青年たちが、被災者一人ひとりに声を掛け、食事を持っていくことで、初めて彼らは手を付けたのです。

この津波の被災地での経験から、Shumei の青年は奥深いところにある現実に気が付き始めました。被災者が本当に必要としているのは、単に食事の提供だけではなく、

何かもっと心からの思いやりを込めたサポートだと気付きました。そして世界には1人ではどうすることもできないような問題が溢れていますが、より良い世界への改善に対しても、何か自分たちにできることがあると目覚め、ボランティア活動を通して、何かに貢献できることの喜びを感じました。

Shumei はこの2年間、被災者に物資の支援を続け、同時に被災地を訪問し、彼らに心を寄せて時を過ごすという活動をしてきました。今でも3.11の被災者を訪ね、物資の支援だけではなく、彼らの心を支える活動を展開しています。傷ついた心はいまだ癒えていません。誰か彼らのそばに寄り添って心の悲しみを聴いてくれる人が必要なのです。今はその誰かになるという支援をしています。

Shumei の青年たちはこの経験を通して、人を助けるために自分たちにできることがもっとたくさんあることを知り、人生の目的と意味について非常に重要な学びを得ました。まさに危機は人間らしさに気付く重要な機会でもあったと言えます。



サティシュ・クマール

「リサージェンス」編集長

イギリスの思想家。インド・ラージャスターン州生まれ、9歳で出家しジャイナ教の修行僧となる。18歳のとき還俗。マハトマ・ガンジーの非暴力と自立の思想に共鳴し、2年半かけて、核大国の首脳に核兵器の放棄を説く1万4千キロの平和巡礼を行う。

イギリス南西部にスモール・スクールとシューマッハー・カレッジを創設。エコロジー&スピリチュアル雑誌「リサージェンス(再生)」編集長。

自分たちからリーダーシップを！

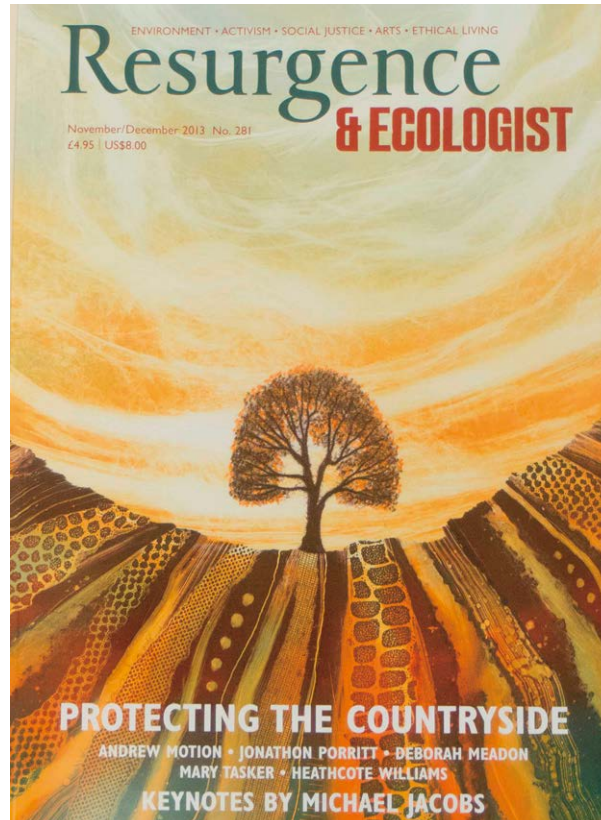
人間はもっと物を作り出す技術とその過程に携わるべきです。しかし現代の科学研究者は経済的利益の算出のみを主眼としています。

大変革はどこか他の場所で起こるわけではありません。それは私たちによって起こすのです。ですから人間の幸福を目的として科学技術を適正に使用するには、まず自分がいかに行動するかということから始まります。権力者に託しては駄目です。彼らが一番眼目を置いているのは、利益追求のための科学技術の導入であって、人々に働く場を提供することではありません。人は機械と違って扱うのが難しく、要求を持ち、不器用だったりします。だから人力を削除して機械に働かせたいのです。

今は世界中どこでも、機械技術による大量生産の衣服や靴や椅子が出回り、その陰で失業者が溢れています。モノ作りを人間の手に戻すには、「9時～5時の普通の仕事に就くためだけの教育はいらない」と若者が主張することです。今の若者はそれ以外何も知らないのです。靴を作ることも、家を建てることも、作物の栽培も、家具を作ることも……何もできないのです。現在の教育システムは、事務職やコンピューターを使う、あるいは細かな作業をする以外、全く役に立たない人材を育てるものであり、機械が他の全てをして

くれるのです。人生に芸術性や工芸技術、想像力や創造性を取り戻すには、手工芸によるモノ作り技術に帰ることで。直接自分の手を使ってモノを作ることに戻らなければなりません。そのためには頭脳教育だけではなく、情操を高め、手工芸技術をも習得できるものでなければなりません。即ち、教育とは、どのように考え、いかに感じ、どうやってモノを作るのかを教えるべきものであり、それは単なる消費者を生むものではなく、生産者を生み出すものであるべきなのです。

自分たちの望む変化を自分たちで起こしましょう。社会の根底である一般層から変革を押し上げる運動、それを先導するリーダー的存在になりましょう。リーダーだからといって、何も有名になる必要はありません。小さな規模の草の根運動で地域集団を形成し、活発な活動の場を設ける、それがリーダーシップです。また自分自身を正しい生き方に導くこともリーダーシップです。素晴らしく、美しく、たくましく、持続可能であり、喜びに満ちた生き方に自分を導けたら、あなたは幸福で歓喜溢れる人となり、まるで寒い所に設置されたラジエーターのように、周囲の人々を暖め、明るく導くことのできる良い見本となります。あなたのそばに寄ってくる人は誰でも心が温かくなります。ですから皆さん、それぞれがラジエーターになりましょう。私たちの生き方の持続可能性や喜びや実践活



エコロジー&スピリチュアル雑誌
「リサージェンス」(2013年12月号)

動の輝きをもっと世の中に放射しましょう。そうすればもっと多くの人が、啓発されて引き寄せられて来るでしょう。それが新しい思考、新しいパラダイム、新しいアイデアに組み込まれていくのです。新パラダイムの形成自体は私たちの究極の目的地ではありません。

私の著書に「ノー・デスティネーション（目的地のない旅）」がありますが、この世に完全なるユートピアというものはありません。どうか皆さん、全てが持続可能であり、良い環境であり、暴力も問題も困難も存在しない完全なる世界を築くことができるなんてことを考えないでください。それはあまりにも退屈な世界です。問題を抱えることは良いことです。その問題を解決するために立ち上がる好機です。過去にもそういう例がたくさんありました。ガンジーは植民政策に立ち向かって闘いました。また人権運動や奴隷解放運動や人民解放運動もそうでしたし、男女同権を掲げて女性が選挙権を獲得したのもそうでした。

これらの問題は全て人間の不完全性から発生したのです。そのような創造性や想像力や人道的な情熱を持って解決せんと挑む好機が与えられたのも、私たち人間が不完全だったからこそなのです。つまり今までもこれからも常に何らかの問題が発生し、存在し続けます。ですから若い皆さん、

今日この場から帰るときに、何も問題などない新しい世界が来る、というような考えを持たないでいただきたい。私たちは常に問題を抱え、それらの解決のために立ち向かい挑んで行くのです。そしてそれは私たちの創造性を導き出す絶好の好機なのです。挑戦する機会があることはとても素晴らしいことです。

若い皆さんは、ちょうど自分の人生を自分で歩み始めたところですね。これからいろいろな問題を抱え、困難に直面していく、それはエベレスト山に登るようなもので、簡単なことではありません。しかし登らなければ、山麓に立ち止まったままです。ですから、その難しさを考えずにまず登ろうと心掛けることです。社会変革、新しい地域の形成、強靱な復興力の生成、これら全てはエベレスト山に登ることや長旅に挑戦することと同じです。私は実際に、8千キロを自分の足で歩いて世界を回りました。とても大変でした。一銭も持たずに出掛けたのです。食事のできないときがよくありました。そういうときは自分にこう言いました。「何も食べ物が無いということは、今は断食する絶好の機会だし、誰か食べ物を提供してくれる人をどうにかして探す好機である」と。屋根の下で寝ることができないこともよくありました。そういうときは野外の星空の下で草を褥しとねとして寝、「こよいはこの無数の星を楽



パンダナ博士と話すサティシュ氏



しみ、明日は誰か暖かな寝床を提供してくれる人を探そう」と自分に言ったものです。これらの困難はとても価値ある挑戦でした。2年半かけて、8千キロを一銭も身につけず、イスラム教の国々や共産国やキリスト教の国々を歩き、多くの裕福な人々や貧しい人々、また時の権力者たちに会い、ホワイトハウスにも行きましたし、さまざまな皇族にも会いました。貧しい人の家や富豪の家にも泊めてもらい、また星空の下で寝ることもありました。それら全てが私の価値ある経験となりました。

今、私たちが力強い新しい社会を築く変革をもたらすためには、農耕文化の復興、工芸技術の復興、また新しい文化の開発が必要であり、それらに挑むことによって、私たちは喜びに満ちた幸福な温かい存在となるべきなのです。挑戦することがあるということは、何かすることがあるということで、それがなければ、何もすることがないわけです。だからこの世には困難な障害があります。モンサント社もあってしかり。少なくとも彼らがどれだけ長く私たちの土地を、土壌を搾取し続けるのか観察できます。このように全てが私たちに絶好の好機をもたらすものなのです。

最後に皆さんに、私の言葉を通して、大いなる希望、偉大なエネルギー、強靱な回復力、そして危険を伴う冒険的

スピリットを贈りたいと思います。皆さん、冒険的な精神を持った人間になりましょう。若々しい^{はつらつ}澁刺としたエネルギーを心に留めてください。どんな冒険も素晴らしいものです。私は77歳になりますが、いまだに何か冒険する機会を探しています。とにかく出掛けて何かをやってみたいのです。先ほど話した最初の冒険旅行で、アルメニアで出会った2人の女性から4つのティーバッグを託され、平和へのメッセージと共にそれを当時の核保有国（ロシア、フランス、イギリス、アメリカ）の首都に届けました。来年はその平和巡礼冒険旅行の50周年記念です。そして新たな冒険精神が、「もう一度巡礼の旅に出かけよう」、と私の心の中から呼びかけてくるのです。ですから私は基本に戻って、またワシントンやロンドンに行きたいと思っています。

けれども、おそらくそれは以前のような8千キロではなく、数百キロくらいだと思いますが、今度は若い人を伴って行きたいと思っています。6カ国からそれぞれ1人の若者、3人の女性と3人の男性、年齢は15歳から25歳までの若者を連れて行きたいと思っています。彼らと一緒に歩き、クレムリンやパリやホワイトハウスに出かけ、大統領や首相とお茶を飲みながら、彼らに尋ねてみたいのです。「核兵器をどう考えているか、またそれは何の役に立つのか」と。



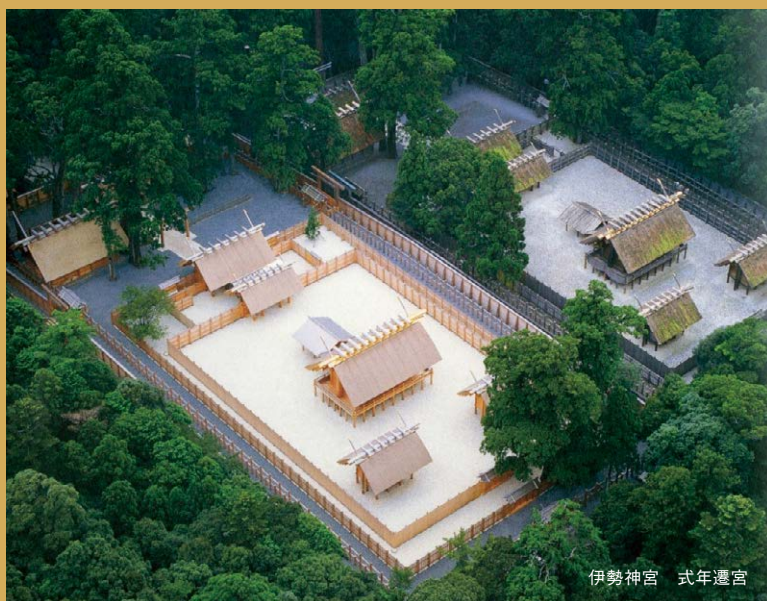
シューマッハ・カレッジ

来年は第一次世界大戦勃発から100周年を迎えます。第一次世界大戦はそれまでの諸戦争を終わらせるために始まった戦争でした。ところがそれ以後世界に起こったことは、戦争に次ぐ戦争であり、何百万、何千万という無数の人々が命を失いました。だから、プーチン大統領やオランダ大統領やキャメロン首相に「あなたの描く戦争のない世界の未来像は、そして核兵器のない世界への見通しは何なのか」と聞きたい。これが77歳の若い冒険スピリットです。ですから若い皆さん、今日この場からお帰りになるときに、自分たちはいかなる困難にも挑み、新しい持続可能な美しい世界を未来につくるための、能力と才能と度量と覚悟がある、というスピリットを胸にしてお帰りいただきたいのです。一緒に立ち上がり成し遂げましょう!

▶ビデオインタビュー

自然と生命の よみがえり

中東 弘（枚岡神社 宮司
大阪府東大阪市）



伊勢神宮 式年遷宮

ジャパンセッションで上映した ビデオインタビューの一部を掲載

今年(2013年)は伊勢神宮と出雲大社の式年遷宮があります。私は、この伊勢と出雲の遷宮という節目の年を逃すと、日本再生そして地球の再生は難しくなっていると思っています。これらの遷宮は、単に「技術の伝承」ということだけでなく、「よみがえり」を意味するものなのです。我々の細胞も数カ月でよみがえっていくように、「よみがえり」なくして生命が生き返ることはありません。つまり、今まさに人々の心が変わらないといけない大事なときに、我々は直面しているのです。

科学の進歩に伴い、人間は自然からかけ離れた生活を送ってきました。しかし、一昨年に起きた未曾有の大震災、これはもう人災と言っても過言ではありません。結果として日本国民は、今までのような生き方、考え方で本当に良いのかと、大反省させられることになりました。

我が国は、太古の昔から植林を行ってきた先人たちの功績に支えられ、現在は森の国になっています。森がつくられ、そして維持されてきたからこそ、水が蓄えられて、今日まで稲作の文化が発展してきたのです。残念ながら、皆このことを忘れてしまっています。この現実を考えたとき、今まさに、祖先の心を振り返り、先人の知恵が山のようにあることに気付かないといけないのです。今まで「効率」だけを考えていろいろとやってきた結果、マイナスの面が非常に増えてしまったのです。祖先の心を振り返りつつ、「日本人の心の在り方」を良い方向に転換していけば、必ずや

世界の平和に貢献できるだろうと思います。実際、日本人は自然から学び、自然に順応した生活を長い年月続けてきました。今我々は、「自然に還る」ということがどれほど大切であるかを真摯に受け止め、行動に移すことができるかどうかの分岐点に立たされています。このときを逃せば大変なことになると思うのです。

もし皆が、一つにつながって生きているという認識を持てるようになると、木に声を掛けたり、花にも「美しいね」と声を掛け、そして人間だけが……という独りよがりの心に陥ることなく、自然界に存在する全てのものから、人間は生かされているのだという思いに到達していくでしょう。しかし、目に見えないものがおろそかにされているのが現実です。「見えるものしか信じない」と。つまり、「幸せというものは、モノとカネで成り立つ」という考え。これでは、全てに行き詰まりを感じるのは当然です。

人間は生きとし生けるもの全てとつながっています。あらゆる植物に対して「ありがとう」「美しいね」と声を掛けていく。そういう「美しい心」になっていかねばならない。そうすると、まさしくこの世は、神々の世となっていく。「モノさえ手に入れば幸せになると思っていたが、そうではない」と気付いた昨今、モノと心の調和が取れ、大自然に、感謝し、大自然の生み出す植物に感謝して共生ができるようになったときに、この世の中は岡田茂吉師がおっしゃったような理想世界になるのではないのでしょうか。

私たちは今、人と自然の関係を見直す時期に来ています。

自然を敬い、自然を観察し、自然の声を聞き、自然から学ぶ。
自然の神聖さを再認識し、自然の法則を尊重する。
そして自然に対し感謝の心を持って接する。

これらのことが新しい社会を構築する鍵となるのではないのでしょうか？

『すべては自然が教えている』……岡田 茂吉

新しい未来を築くために私たちがすべきことは、
この言葉に全て示されているように思います。
